5 月 人 権コラム

プリンセスを超えて
～ディズニー・アニメとジェンダー～

大阪教育大学　神村　早織

ちょうど昨年の今頃は、コロナ禍の中、外出を控えるために、「おうち時間をどう楽しむか」に頭を悩ませていたのではないだろうか。ホームセンターではガーデニングやＤＩＹのコーナーに人が集まり、家電量販店ではオーブンレンジが人気の的だったという。さて、そんな中、私はサブスク（定額料金制）の動画サイトにずいぶんお世話になった。中でも、これまであまり見る機会のなかったディズニー・アニメを新旧取り混ぜて鑑賞させてもらった。

ディズニー・アニメといえば、絶大な人気を誇る「ディズニー・プリンセス」というブランドを有している。古くは「白雪姫」「シンデレラ」「眠れる森の美女」など、日本でも多くの「女の子」がその絵本を読み、またアニメを見て育ってきた。しかし、そこに描かれていた女性像は、端的にいえば「白馬に乗った王子様の登場を待つ女の子」だ。付け加えるならば、それはいつも色白の白人の女の子だった。そして、可愛くて、美しくて、従順で、力弱い存在である。悪役の女性に騙されたり、呪いをかけられたりして、ずいぶんと苦しめられるが、その困難を解決するのは自分の力ではなく、魔法や王子様の登場である。「眠れる森の美女」は最たるもので、オーロラ姫はただ寝ているだけである。それでも、物語のゴールには、王子様との幸せな結婚が約束されていた。

こうしたディズニー・アニメの典型的なキャラクター設定に変化が見え始めるのが、「リトル・マーメイド」や「美女と野獣」「アラジン」である。いずれも 1990 年前後に作られたものである。主人公のアリエルやベル、そしてジャスミンは、自ら積極的に行動し、外の世界に飛び出していこうとする知恵と勇気を持った存在として描かれている。ディズニーが、世界中の女の子たちに発信するメッセージに大きな変化の舵を切ったのである。そして、1998 年に公開された「ム

ーラン」は、中国に古くから伝わる物語をモチーフに、白人中心から抜け出して、アジア人の女の子を主人公に作られた。このアニメのテーマは、恋愛でも結婚でもなかった。ムーランが「女のくせに」「女だから」と自分を縛るものから自由になり、「本当の自分を見つけること」をテーマとして制作された。また、「メリダとおそろしの森」も興味深い。こちらは、幸せな結婚をすることが女の幸せと信じて疑わない母親（女王）と、弓矢が得意で結婚なんかしたくないメリダ（王女）の対立と葛藤がテーマである。結婚は目的ではなく、カッコいい王子様も登場しない。「おうち時間を楽しむ」時には、こんな視点でディズニー・アニメを見直してみてはどうだろう。